

優秀賞

## 熊本地震から学んだつながりの温かさ

熊本県 熊本県立八代工業高等学校一年 小橋 歩乃果

私が中学校に入学してすぐ、新しい生活がはじまった矢先に熊本地震を経験しました。多くの死者と大きな被害がでました。その二年後、私は中学三年生となり、中学校生活最後の文化祭の劇で、脚本作りと総監督をさせていただきました。その劇の題は『ともにく熊本地震を乗り越えてく』。熊本地震を経験して、テレビやインターネットなどで益城町や熊本城などの映像を見て「こうして普通の生活を送れているのは当たり前ではなく奇跡である」ということを感じました。それを劇として発表することで演じる側も見てくれる人にもそれを伝えたいと思いました。そんな劇を皆でつくりあげていく中で、私は劇の最後に発表する作文を書くため、この劇の題である「ともに」という部分を重視して改めてより詳しくインターネットで調べていきました。そこでいくつかの感動するエピソードを見つけました。

一つ目は避難所のグラウンドに、四月十六日に「飲み水ください」と書かれていたのが、四月十八日には「飲み水ありがとうございます」といがるけん」という文字に。感謝の

気持ちと地震に負けないという気持ちが感じられて、心が熱くなりました。

二つ目は、あるトラックの写真です。そのトラックは熊本に支援物資を運んできてくれていたものだったので、なんと宮城県の石巻市から不眠で駆けつけてくれていました。そしてそのトラックに貼られた紙には、大きく「宮城から五年前の恩返し♡」「負けねど地震！頑張ろう熊本！」などの励ましの言葉が書かれていました。離れていても人と人がつながっていること、そしてそのありがたさを教えてくれました。他にも熊本城再建のために多くの人が基金に協力してくれたり、心温まるエピソードがたくさん見つけられました。

人と人とのつながりの温かさ、ありがたさを、そして何気なく過ごしている毎日が当たり前ではなく、奇跡なのだということを、劇をつくりあげていくなかでより強く感じました。そして、そのことをもっと多くの人に知ってほしいという思いを作文に込めて発表しようと思いました。

文化祭当日、一・二年生の発表も終わり、いよいよ私達の劇がスタートしました。一人一人がセリフ一つからちよっとした動作にいたるまで感情を込めて演技、練習の時よりもずっと心に響くようなものになっていたのではないかと思えます。そうして順調に進んでいき、全員合唱のときになりました。楽曲はアイドルグループの嵐の「ふるさと」です。熊本地震発生後、嵐の皆さんが熊本にメッセージを発信してくれたこともあり、この曲に勇気づけられた方もいるだろうと考え、心を込めて歌いあげました。そしてついに私が作文を発表する番になりました。実際にステージに立って前を見ると、体育館内は暗く、ステージ上だけが明るい状態だったので、自分が視線が集まっていることがなんとなくわかりました。と同時に多くの人が私の話を真剣に聞こうとしてくれていることもわかってとても緊張しました。話している途中で少し止まってしまったのですが、最後まで自分が伝えたいと思っていたことを話すことができました。

その中でも、前述した宮城から物資を運んでくださった方のトラックの話は「離れていても共にあるんだ」ということを私自身、教えられたので話せてよかったです。無事、発表が終わって、先生方や友達が声を掛けてくれました。中でも私がうれしかったのは、「劇を見て、また、私の話を聞いて涙を流してくれた人がいた」、「感動して泣きそうだった」という話でした。また、こ

の日は小学校の六年生も見に来てくれました。私は緊張で気づいていなかったのですが、その子たちの中にも泣きながら話を聞いてくれていた子がいたという話も聞き、「ちゃんと伝えられてよかった」と私の方も何だか感動して泣きそうになってしまいました。

これから、この時の感動と、熊本地震で改めて気づかされた人とのつながり、日常のありがたさを胸に、何にでも精一杯取り組んでいきたいと思えます。

